

エコ村か緑の住宅か

朝日新聞大津総局長 大峯 伸之

琵琶湖の東岸にある滋賀県近

江八幡市は「水郷の街」で知られ、年間250万人以上の観光客が訪れる。

西の湖や周辺のヨシ地、八幡堀などは「近江八幡の水郷」として、重要な文化的景観の全国第1号に選ばれた。近江商人の商家も数多く残っている。

そんな街で今年4月、「小舟木エコ村」の起工式があった。甲子園球場が四分、15畝の土地に戸建て住宅371戸をつくり、来年の開村を目指す。最終的には1200人が住める。

※ ※ ※

7年前に地元の団体や大学、企業などが参加し、滋賀県立大学の仁連孝昭教授を代表に「エコ村ネットワークキング」を設立した。4年前に事業会社の「株式会社地球の芽」もでき、国内外の先進地の視察や海外のエコ村関係者を招いたシンポジウムの開催などを重ねてきた。

構想から7年。ようやく造成工事にまでこぎつけたエコ村は、

どんな街を目指すのか。

エコ村というところ、ちょっと変わった人が里離れた地に集まり、自給自足で暮らすというイメージがある。こちらは琵琶湖から2*、市街地と農村の中間に位置する。持続可能な街づくりを掲げ、未来社会のモデルを目指す。1戸あたり平均70坪(約230平方メートル)という土地の分譲がこれから始まり、ぜひ住んでみたいという人たちがともに新しいライフスタイルをつくり上げようというのだ。

住宅の構造や壁土にはできるだけ地元の木や土を使う。どんな植栽や建物にすれば、あまり冷暖房に頼らなくても快適に過ごせるのか。太陽光や風力、雨水をうまく使う。また、全戸には10坪の家庭菜園が付く。周辺の農家とも提携し、安心でおいしい食べ物にこだわる。生ごみは家庭用処理器で堆肥にし、それを菜園や農家で使う。

昔の生活に戻るのではなく、最先端の生活を送りながらエネルギーの使用、つまり二酸化炭素の排出量は現在の生活の4分の1にするのだという。

一方、行政との手続きでは実現しなかったことも多かった。道路沿いの並木は、「維持管理ができない」と県や市に断られた。雨水を流し込む調整池を生き物がすむビオトープにする案やバイオトイレの導入は、法律などをたてに認められなかった。資源循環型社会をさぐる研究所の設置も、「住宅以外はだめ」と実現できなかった。

※ ※ ※

仁連教授は未来社会を開くには自分たちで考え、自分たちで築くという「自考自築」がきだという。そのために、1人の人間が一つの仕事しかないのではなく、いくつもの仕事をやる「マルチジョブ」を提唱する。

エコ村を単なる「緑に配慮した分譲住宅」に終わらせないようにするのは、どうすればいいのか。新しいことに挑もうとすると、立ちほだかる縦割り行政の壁。法律や条例の規定にはそれぞれの理由があるが、あまりにもがんじがらめではないか。新しき村の問いかけと闘いはこれから続く。

本

有岡利幸著
桜 I、II

(法政大学出版局 各2000円＋税)



日本の春を彩る桜。桜なしに日本の春は考えられない。なぜ、日本人はこんなに桜が好きなのだろうか。いつからどのように桜とかわつてきたのだろうか。日本書紀、万葉の時代から現代に至るまでの2000年にわたる桜と日本人のかかりの歴史をたどる。

桜の生態から説き起こし、万葉集の和歌や平安時代の物語に描かれた桜から、鎌倉、室町時代を経て、「花は桜木、人は武士」の江戸時代までの桜の文化史を丹念につづる第一分冊。

明治以後、「梁井吉野(メイヨシノ)の大発見やナショナルリズムと軍国主義のシンボルとして政治的に利用されてきた桜の近現代史をたどり、一方で人々の生活に欠かせない花として広く親しまれてきた桜の諸相を克明に描く第二分冊。二冊計750頁に及ぶ力作だ。

法大出版局の「モノと人間の文化史」シリーズの137巻目。このシリーズで「里山」「松茸」「梅」なども著している著者は、桜花の真の美しさは「他の樹木の緑越しに眺めるのが一番」とし、単一的な「桜の純林」づくりに余念のない現代の風土に警鐘を鳴らした。

(4)